

鎮守の森だより

NPO 法人 社叢学会ニュース

創刊号

2003年1月20日

会報の発刊に寄せて

社叢学会理事長・京都大学名誉教授

上田 正昭

昨年5月26日に、京都の賀茂御祖（下鴨）神社糺森研修道場で設立されました社叢学会も、会員の皆様のご協力とご支援により、すでに会員数も500名をこえ、昨年の10月28日には、内閣府によるNPO法人の認証を受けることができました。

本学会は定款第2章の第3条に明記されていますように、「鎮守の森を始めとする社寺林、塚の木立、ウタキ等」を総合的・学際的に調査研究して、「歴史的・共同体的な」森の「保全・拡充・創出を図ること」を主要な目的として結成されました。

その目的を実現する第一歩として、昨年の9月から大津市・亀岡市・吹田市・桜井市・三鷹市・東京都世田谷区で社叢の調査と研究に取り組んでまいりました。また関西（大阪）と関東（東京）とで、隔月に定例研究会を実施し、多数の皆様のご参加をえて、着実な歩みをつづけています。

また、調査のためのガイドブック『森の見方・調べ方』をまとめて、本年の3月には文英堂から出版する予定です。鎮守の森の核として注目すべきものに「入らずの森」があります。その研究会も昨年の12月から具体化して、その研究成果も公刊される

はずです。

社叢をめぐる問題はさまざまですが、無計画な都市開発による森の伐採、産業廃棄物や残土などの捨て場など、法的に対処すべき課題もあります。そこで社叢をめぐる法律問題検討委員会を設けることになりました。また樹医はすでに存在しますが、樹木を面としてとらえる社叢医インストラクター研修会を本年の秋から主催することになっています。

このように本学会がスタートしてからの半年ばかりの間にもいろいろな調査や研究の動きがありました。「社叢学会ニュースレター」だけでは、会員の方々に十分な連絡ができませんので、このたびあらたに、会報「鎮守の森だより」をつくることにしました。この会報が調査と研究などの動向を伝え、さらに各地の部会を始めとする会員の皆様の活動を紹介する場となることを願っています。

本年の5月24日・25日には、國學院大学で第2回の総会および研究大会を開催しますが、スタートしてからの一年のみりと今後の方針が発表されると思います。多数のご参加を期待します。

社叢のうちとそとー鎮守の森とウタキー

講師 上田 正昭
(京都大学名誉教授)

「鎮守」という用語はたとえば古代の東北におかれた陸奥鎮守府など、古くから使われている言葉だが、いわゆる「鎮守の神」や「鎮守の森」という言葉がひろく使用されるようになったのは、「小学唱歌」の“村まつり”のひろまりがひとつのきっかけになっている。2002年の5月、社叢学会の設立に際して、その準備の段階で鎮守の森学会にしたほうがわかりやすいとの意見もあったが、鎮守の森をグローバルに比較研究しようとする場合、聖なる森の信仰は沖縄あるいは東北アジアや東南アジアなどにも広がっていて、社叢のほうがより概念が広がるのではないかとの意見にしたがって、本学会は社叢学会と命名された。

20世紀には自然の破壊、地球の汚染がいちじるしく進行したが、日本においても乱開発などによる森林の荒廃には憂うべきものがあり、鎮守の森そのものがあらたな危機にさらされている。沖縄のウタキの森も例外ではない。

(1) 中国の古典における「社」と古代やまと言葉における「ヤシロ」の意義を比較し、あわせて中国の「天神」・「地祇」と日本の天つ神・国つ神の違いを明確に認識する必要がある。「ヤシロ」は『播磨国風土記』が「屋代」とも書いているように、カミをまつる建物のある聖なる場所を意味した。『出雲国風土記』がその冒頭の総記にあたる文の中で、神社を「参佰玖拾玖(三九九)所」などと場所で表記しているのは興味深い。日本の「天神」は(イ)日・月・星辰な

どの天上の神ばかりでなく、(ロ)天つ神すなわち高天原系の皇室ゆかりの神、(ハ)雷雨神、(ニ)菅原道真公とさまざまであり、聖なる森の研究にあたっては、場所とカミ観念の変遷にも注目する必要がある。

(2) 天つ社・国つ社という社格が設けられたのは天武朝であり、その後の歴史の中で社叢はどのような変遷をたどったのか。春・秋のマツリには「郷飲酒の礼」が行われていたが(たとえば「大宝儀制令」の『古記』)、とりわけ荘園制の枠をこえた惣村・惣郷の時代(南北朝)における宮座・宮ノ党などの祭祀グループと鎮守の森とのかかわりや明治39年の神社合祀令以後のありようには注目すべき問題がある。

(3) 『出雲国風土記』に「上のほとりに樹林あり、これ則ち神社なり」と記し、『万葉集』に「モリ」というやまと言葉に「社」・「神社」の字をあてているように、本殿や拝殿などが造営されたのは後のことである。桜井市の大神神社はもちろん、奈良市の春日大社や天理市の石上神社なども、もともとは本殿がなかった。古代のやまと言葉では「モリ」と「ハヤシ」は異なるが、やがて「樹林」・「森林」が一般化した。

(4) 沖縄のウタキには、(イ)琉球王朝のウタキ、(ロ)共同体のウタキ、(ハ)門中又は個人のウタキがあるが、カミ観念の多様性・森そのものの信仰や立地の条件には、鎮守の森と共通する要素がある。その異同をみきわめることは、社叢研究に寄与するにちがいない。

次回予告(第4回関西定例研究会)

日時：2003年3月29日(土) 14:00~16:00

場所：社叢学会事務局(大阪府中央区谷町2-2-22 TEL06-4790-0155)

テーマ：社叢調査報告

報告者：各調査担当者

私の目で見た日本の社叢

講師 ケビン・ショート

(東京情報大学環境情報学科教授)

ケビンさんは、日本の文化を素直な目で見ており、日本の里山を何度も「この風景は素晴らしいよ」とおっしゃっていた。大変楽しそうにお話になるので、聞いている我々も楽しくなる講演会であった。

ケビンさんはアメリカのニューヨークで育ったそうで、日本で暮らし始めたのは32、3年前からである。そのような方の講演を通じて、私は日本の自然風景や、日本古来の風土の素晴らしさ、美しさを再認識させられたように思う。

我々が、懐かしく、素晴らしいと感じる風景を原風景とすると、三つの原風景が私たちの体には生きている。一つが、個人的に幼い頃体験した風景、二つ目が日本人(民族)共有に懐かしいと感じる風景、三つ目が人類共有に懐かしいと感じる風景である。私は、今まで日本の里山景観に懐かしさを感じるのは、日本人固有のものだと思っていた。しかし、ケビンさんの講演を聞いて、日本の自然風景は、人類全ての人が見ても、懐かしく、素晴らしいと感じることができる可能性があることがわかった。そのように人類すべての人が懐かしさを感じることができる日本の原風景を、我々は守っていかなければいけないことを改めて考えさせられた。

ケビンさんは、「人と自然の関係は生態学的な視点だけではなく、自然と人との思いの関係が大事なのだ」と何度もおっしゃっていた。我々が住んでいる地域にある自然には、「文化」化した自然、「自然」化した文化、歴史、つまり風土があるはずである。

それは、その地域の人々の心の中にあり、親から子に話し受け継がれてきたものも多かったはずだ。昔話や、おまじないにはその風土、自然に対する思いを含んだものが多くあったと思う。

それが、この頃では大変少なくなっているのではないかと感じる。我々は自然を生態学的に保全していかなければいけないと頭ではわかっている、風土に関するものを守り、子どもたちに伝えていかなければいけないということを忘れてしまいそうになっているのではないだろうか。今ある日本の自然や風景、文化は我々の祖先が守り、愛し、育ててきたものだったはずである。しかし、現代に住む我々は、それを生まれる前からあるもの、当たり前ものとしてとらえ過ぎ、軽視している一面があるように感じた。

今回の講演では、日本の自然風景をケビンさんに素晴らしいものであると認めていただいたことによって始めて、日本の自然風景や風土の重要性を再認識し、考えさせられる機会を頂いたように思う。

(文責：長谷川 素子)

第3回関東定例研究会の報告は、同研究会に参加された東京農業大学大学院の長谷川 素子さん(造園学専攻)にご執筆いただきました。研究会に参加された方の感想やご意見をお待ちしています

社叢学会事務局

次回予告(第4回関東定例研究会)

日時：2003年2月15日(土) 14:00~16:00

場所：東京農業大学・世田谷キャンパス 18号館1階1811教室

(世田谷区桜丘1-1-1 TEL03-5477-2428)

テーマ：鎮守の森と家郷社会 ~日本の集落秩序を考える~

講師：園田 稔氏(京都大学名誉教授)

とびくす

“クスノキ残して” 涙の嘆願

社叢学会も助命にひと役

昨秋、愛知県の当会々員のK氏より 10月3日付けの『中日新聞』の記事が当事務局にFAXされてきました。

記事の内容は、「“クスノキ残して” 涙のお年寄り」と題するタイトルで、樹齢千年といわれ「樹霊」が宿るとして信仰を集める名古屋市中区の雲龍神社境内のクスノキが、市の区画整理事業のため、伐採の危機に直面し、地元のお年寄りは、幼いころから「くすのきさん」と呼び、親しんできたのにと涙を流して悲しんでいる、というものでした。

このクスノキは雲龍神社の神木で、樹高約 20メートル、幹回り約7メートルの大木。「弘法大師が植えた」「織田信長が戦勝祈願に手を合わせた」などの伝説もあり、第2次大戦の空襲で焼けて枯れかけたが、幹の根方から新しい芽が吹いて復活し、神秘的な姿を取り戻しているとのこと。

当事務局は、この新聞記事を上田正昭理

理長にFAXしましたところ、即座に「クスノキ保存の要望書を出しましょう」と返答があり、原稿もFAXされてきましたので、社叢学会理事長名で名古屋市長宛の「要望書」を送付しました。「要望書」の内容は次の通りです。

拝啓

社叢学会は、鎮守の森をはじめとする日本の樹林の調査と研究、保全と活用をめざす全国学会です。去る10月3日付けの「中日新聞」で、名古屋市中区の雲龍神社のクスノキが伐採される危機にあることを知りました。

市街地整備の計画もあるとは存じますが、「くすのきさん」の名で親しまれてきた由緒ある神木を保存し、活用する方策を改めてご検討いただくようお願い申し上げます。

敬具

「要望書」の送付と機を一にして、地元でも「くすのきさん」の助命嘆願の署名運動が行われ、とうとう名古屋市側も「くすのきさん」を保存することに決定したそうです。まずは目出度し目出度しというところですが、「土地を売って何千万になるのかわからないが、あれだけの木を切る価値が、その値段にあるのか」という地元の人の声が、まだ耳からはなれません。

事務局から

- 社叢学会の会報『鎮守の森だより』創刊号をお届けします。昨年末にご送付しました「社叢学会ニュースレター」にも記しましたが、当会報は今月より隔月おきに年6回刊行いたします。主な内容は、月々の定例研究会の概要および予告、学会の活動状況、会員の方々の出版物紹介、鎮守の森の調査状況、社叢に関連した情報などです。
- 5月24日・25日に東京の國學院大學を会場に開催する第2回社叢学会総会の研究発表者を募集中です。詳細は事務局にご連絡ください。

編集後記

12月某日、岩野事務局長から電話「明日、上田篤先生が事務局にこられるので出てくるよーに」。はいはい。で、翌日。「1月から会報を出すからよろしく!」。うへ、そんなこと急に言われてもなあ…

正月休みも返上して(ウソ!)、ぺこぺこパソコンを叩き、何とか1月中に間に合ったぞお! どうだ! まいったかあ!

今後、会員の皆さま方のご意見や話題提供をいただきながら、この会報をすくすく育てて参りたいと思います。皆さま、よろしく願いいたします。(藤岡 郁)

発行人 社叢学会事務局 〒540-0012 大阪市中央区谷町2-2-22 NSビル5階

TEL/FAX06-4790-0155 E-Mail jim@shasou.org

社叢学会関東支部 〒171-0021 豊島区西池袋2-36-1 ソフトタウン池袋1101

TEL03-5950-6507 FAX03-5950-5184 E-Mail shasou@macrovision.co.jp

《平成 14 年 1 月から 10 月までに開催された研究会内容を要約しました》

平成 14 年 1 月 24 日

神社から見た鎮守の森

藺田 稔 (京都大学名誉教授・秩父神社宮司)
場所／大阪・社叢学会準備室

鎮守の森を積極的に守り育ててゆこうという運動が表面化したのは昭和 40 年代から 50 年代である。昭和 58 年 3 月に神社本庁編で刊行された冊子『神社とみどり』の中で「森への対策」という一文があり、「昭和 46 年 7 月に神域のみどりを守る会を結成し、神社の森の保護を推進してゆこう」という運動方針が記されている。爾来、天皇の植樹祭の折には各都道府県の神社において緑化運動を行なった。又、神社本庁としては、昭和 58 年 3 月に当時の自治省・建設省に対し、「公共事業の名のもとに神社境内地の尊厳を安易に破壊せぬように、環境保全の面からも最近見直されている鎮守の森を守るように」との要望書を提出し、森の喪失の問題に取り組んだ。平成 6 年 9 月に伊勢市において『千年の森に集う』シンポジウムを開催し、これからの「千年の森づくり」構想を提示した「伊勢宣言」を提言。平成 9 年にハーバード大学で開催された「エコロジー運動と宗教」の関わりについてのシンポジウム、平成 10 年の「世界宗教とエコロジー」と題するシンポジウムに出席し環境学的指針を提示。

平成 14 年 3 月 21 日

植生学から見た社叢の価値と危機

菅沼 孝之 (元奈良女子大学教授)
場所／大阪・社叢学会準備室

「社叢」という言葉が天然記念物指定に際して初めて用いられたのは昭和 3 年で、新潟県の「宮堅八幡宮社叢」である。又、「樹叢」という名称も用いられ、奈良県吉野町の「妹山樹叢」は代表的。「樹林」という言葉は大正 13 年の奈良の「春日神社ナギ樹林」が有名。社叢を植物生態学的に調査を行ったのは昭和 4 5 年頃からで、財団法人土井林学振興会の肝入りで、全国的に社寺林調査を行った。この調査結果は『森林』(1 号～12 号)に掲載。この調査によって地域の環境保全に重要なデータを得ることができた。例えばイチイガシ林が開発されて、森林が孤立化し、さらに林木が老化したり台風などで倒れてしまい、イチイガシが生育する条件が失われている地域が多いことがわかった。社寺林の良好な維持を妨げる要因は、人為条件では人の立入りと森を主とする境内の縮小で、自然条件では台風や樹木の老化があげられる。鎮守の森の環境の悪化が進んでいる現在、どう保全するかが重要な課題。

平成 14 年 6 月 16 日

上原敬二と明治神宮の森

進士 五十八 (東京農業大学学長)
濱野 周泰 (東京農業大学助教授)
場所／東京農業大学・世田谷キャンパス

森には護る森と造る森がある。造る森の代表的なものが明治神宮の森である。わが国における造園学を本格的に実行したのは上原敬二である。その上原が最初に取り組んだのが明治神宮の森であった。上原は明治神宮の森を造営するにあたり、すでに日本中の鎮守の森の植生を調査しており、『樹木大図説』(全 3 巻)も著している。その中に「樹芸学」という言葉を用いている。「樹芸」とは、樹木の本質や特質を無視して行なおうとするものではない。自然の摂理や自然のルールや原理を十分判った上で、それを人間のまわりにどう位置付け、どう付き合っけてゆくかという知恵である。上原の遺した貴重な資料は、移植、森づくり、参道、内苑・外苑などをはじめ、多岐にわたって非常に詳細な記録を残している。

平成 14 年 7 月 27 日

鎮守の森研究の過去・現在・未来

上田 篤 (京都精華大学名誉教授)

場所 / 大阪・社叢学会事務局

東海道新幹線ができたとき (昭和 39 年 10 月)、その車窓風景は日本の国土の田園地帯を突っ走るため従来と異なり、山野河海が広々と展開するなかに点々と森が目につくようになった。鎮守の森だ。それに興味をもっていろいろ調べるうちに、45 年大阪万博が始まり、会場に広場をつくることになり、小豆島の亀山八幡宮のお旅所をモデルとして「お祭り広場」を設計した。53 年、大阪大学環境工学科に移ったのを機に「鎮守の森保存修景研究会」をつくり、滋賀県、大阪府、名古屋市等で鎮守の森に関する環境工学的な実態調査を行ない、その成果を、59 年『鎮守の森 (鹿島出版会)』としてまとめ、環境庁の環境優良賞を受けた。平成 10 年に社叢学研究会をつくり、10、11 年にサントリー文化財団から研究助成を受け、その成果を 13 年に『鎮守の森は蘇る (思文閣出版)』にまとめ、翌年、社叢学会が発足した。未来は「入らずの森」に焦点を当てたいと考えている。

平成 14 年 9 月 28 日

植物学から見た社叢研究

山倉 拓夫 (大阪市立大学教授)

場所 / 大阪・社叢学会事務局

社寺林の学術的価値と社会的存在意義について考える時、特に国の天然記念物に指定されている社寺林は学術的価値が高く、非常に稀な植物がある。生物相の保全という面からも貴重である。社会的意義としては、地域のエコミュージアムとして、地域の自然環境保全のシンボルとして、地域住民の結合のシンボルとしての存在などが考えられる。地球上の生物の総種数は約 27 万種といわれているが、日本産植物の総種数は約 5,500 種である。では、社叢に何種の植物が棲んでいるかとなると、現時点で 1,227 種で、樹木は約 300 種である。今後、種のインベントリー (地域植物相)、種の棲み場所 (ハビタットとニッチ)、植物社会学 (社叢分類学) の調査研究が必要。

平成 14 年 10 月 19 日

水防拠点としての社叢

宮村 忠 (関東学院大学教授)

風土工学と社叢学

竹林 征三 (富士常葉大学教授)

場所 / 東京農業大学・世田谷キャンパス

<水防拠点としての社叢> 水防は河川水害の警戒防御を意味する言葉であるが、地域発想的な水防によるトラブルは古来多い。そうした中で、北海道の石狩川上流の南幌町では、明治時代後期に川のバイパス工事を行ない、流域一帯を水害から護った。この工事の責任者を称える意味から治水神社を設け、毎年治水の植樹をし、鎮守の森をつくった。全国にこのような例が多く、水神さん、水分神との関係が深い。

<風土工学と社叢学> 「風土工学」とは、風土とハーモニーし、風土を活かし、地域を光らす、地域づくりのテクノロジーである。「景観十年、風景百年、風土千年」といわれるが、昨秋 11 月、富士山と周辺の地域環境のみならず、富士山を学際的に調査研究する富士学会を設立。富士学と社叢学を対比すると、それぞれに日本人の思想のシンボルであることが共通する。いわば一卵性双生児ともいえる。